『ゆけむり史学』第七号の刊行に寄せて

田村憲美

いまはご退職なさったけれども、本学大学院の設立に尽力され歴史学専攻で当初から指導に当たられた、日本近世史の後藤重巳先生が勲章をお受けになったので、昨年末にそのお祝いの会が開かれた。先生は謙遜なさっておられたが、研究者として教員として長い間のご活躍の賜物で、多くの参加者が集まって、それを祝福したのも当然のことである。

そこには、かつて後藤先生から親しく指導をうけた卒業生の方々も何人もお見えになっていて、教員たる先生の祝賀会にふさわしかった。その少なからぬ人数は、大学院歴史学専攻の修了生で、会合の末席にいた私にとっても懐かしい方々だったから、後藤先生のお蔭で、思いがけない大学院同窓会となった。先生の余慶に与ったのである。

修了後、五年から十年程度を経たこれらの方々は、めでたい場の雰囲気もあって、にこにこと笑いながら「私を覚えておられますか」と近づいてこられる。幸いなことに忘れてはいなかったが、ずいぶんと堂々とした物慣れた振舞いに、見違えるような思いだった。後藤先生も喜ばれておられたにちがいない。

これらの皆さんは歴史学専攻で日本近世史を専攻されたわけだが、その訓練・知識が基礎となっている職場に勤務している方もいれば、そうではない方もおられて、いまの職業・職場はさまざまである。前者の方には本誌に論考や史料紹介を寄稿する常連もいる。

大学院学生の職業への経路は、どこの大学院でも悩ましい問題で、とりわけ歴史学専攻の学生の場合は西洋史あり、東洋史あり、日本史ありだから、例えば考古学を専攻したから自治体の発掘担当者というような意味では、こうなったら理想的という定まった型はかならずしもないと思う。悩んだ時には、先達の事例と経験に学んで研究するのが、もちろん歴史学を専攻する者の当然であろうと思いついたので、大学院修了後の閲歴やいまのお仕事について近況報告を書いていただけないか、とお願いした。さらに、この会合参加者以外の方にも声をかけてみた（編集担当の中西さんに相談しない独走で、申し訳なく、お許しいただきたい）。

今年度も新しい『ゆけむり史学』が刊行されることになった。これも在学生や修了生の皆さんの寄稿があり、また編集に携わる学生の尽力があってのことだから、歴史学専攻の力量を示すものとして、おおいに喜ばしいことといわねばならない。教員の身勝手な願いかもしれないが、この誌面が、修了生と在学生のより広い交流の場ともなればと思っている。

さて、本学は本年度に学外第三者からの大学評価を受けたが、そのさいに『ゆけむり史学』は大学院学生の研究活動を示す具体的な資料として、評価委員の方々に配布されたと聞いている。さように歴史学専攻の大学院学生にたいする評価と期待は高い。